

農業から離れ行く「有機・無農薬」のイメージ

—羽島パワーファーム公開パネルディスカッション「有機農産物を問う」より—

岐阜県岐阜市の県民ふれあい会館で8月7日、公開パネルディスカッション「有機農産物を問う：人・環境に対して、安全の質と量を考える」が開かれた。主催者は、「ワンランク上の産直をネットワークする」をスローガンに、無店舗産直を行っている若手農業経営者の集まりである羽島パワーフーム（代表：近藤幸盛氏）岐阜県羽

島市中町石田105 TEL058-398-8755)。岐阜大学農学部教授・福井博一氏を司会に、農業経営者、農業資材提供者、流通関係者、消費者と多彩なパネラーによって、「有機・無農薬」農産物に関わる栽培技術上の問題からマーケティング構造の問題までと、踏み込んだ討論がなされた。ここにその内容を紹介する。

天敵を利用した防除対策をやり始めたときつかけは、省力化ということもあるのですが、以前、たまたま残った農薬を川に流してしまったことがあります。そうするとやはり魚が死ぬんです。大きな魚が死んで、人間は大丈夫かなと考
えまして、まず作業者にとって安全な農薬散布って何かなと思いました。昔はトマトにとっての安全、薬害が出ない安全という基準で農薬を選んでおりました。今は、天敵に優しい、自分にも安全な防除法と考え、やつております。

一番忙しい時期です。人手が足りないと、いうこともありますして導入しました。8年の秋から周年栽培をしております。

導入とともに思い切った防除体系の変更をしました。まず平成6～8年の間は、ハチを春だけ利用することにしました。春は施設園芸のトマト農家にとっては一番出荷量が多くなる、成長が早くなる

石原一郎（水耕トマト栽培家）「私は水耕栽培を行つておりますが、ハウスの増設等、規模拡大をする中で、省力化のためマルハナバチを導入しました。天敵の

農薬削減の努力に見合わない市場評価

う方向で動いておられるのですが、実際そうでない生産者の方もおられる訳ですね。皿井さん如何でしょうか。

皿井重典（イシゲロ農材栽培システム開発室次長）：はい、買う方と売る方の力関係があると思うのです。あるところから集めてある市場まで流すと、その中で規格と言うものが当然出てきます。何が規格の対象になるかと言うと、形や大きさ、重さあたりが直接金額に跳ね返ってきます。それでランクができるわけです。が、重さが出ればお金が取れるという点は、今の流通の中での欠点と言つか、弱

安全を意味していらっしゃるんだろうなあと解釈させて頂きました。農薬を使えば栽培も簡単になつて、それは仙格にも反映されているんだなと思いました。農薬を減らしていくことは、大変なご苦労なのだなということが分かりました。

河野加代子（アクリ・サボーラース・ラブ）：最後にお話しになつた、トマト栽培をなさりたいと伺つて、私はそれを頂く側なわけですね。更に、食べ生産者にとつても安全である、そういう人にとっても安全など、うことを加えて、

きるわけですね。それを、フェロモントラップや、天敵、ネットの利用など、石原さんはいろいろな努力をされている。つまり、農薬を使わないことによって、極めて労力が掛かることを、石原さんは教えて選択しておられるわけです。その事について、消費者の立場として、河野さんはどう思われますか。

市場が無農薬栽培家小林寶治とを大切に向、今、なトマトう農業をていうの志向すわる。しかざるを得

市場が求める単一周年栽培と 無農薬栽培の矛盾

無農薬栽培の矛盾

市場が求める単一周年栽培と

小林寶治（有限会社創農社・有機農産物販売）“私は輪作・適期適作ということを大切にしていますが、今の農業の方に向、今、石原さんがやつておられるようなトマト単作で規模を大きくして、とう農業を志向すればするほど、無農薬っていうのは難しくなると思います。福井・单一作物の周年栽培というものを志向すればするほど、無農薬は難しくなる。しかし、現実にはそういう経営をせざるを得ない。今言われた輪作で、いろいろ

ですよね。ところが石原さんが一生懸命志向しておられる、農薬を使わない、あるいは農薬を減らしてやつていこうといふのは今のところブランドにはなっていない。小林さんは以前から有機無農薬を実践しておられて、それに対する考え方いかがですか？

点になつてしまつてゐるなと思ひます。
しかし、「ウチのトマトは甘いですよ、
健康ですよ」ということを売りにした生
産者さんが増えてきているのも現状です。
福井・今、流通の話が出て参りましたの
で、平原さんにお伺いしたいのですが。

福井博一さん

(コードィネーター 岐阜大学農学部教授)
リンゴ・柿を中心とした果樹の発育生理についての研究に加え、近年は花卉の育種・生産システム開発を中心とした研究を行っている。また、最近では環境保全型農業に関する情報を収集し、岐阜県の農業振興に貢献している。



小林寶治さん

(ペネリスト 有機農産物栽培家、(有)創農社)
田1200a、畑350a、果樹200a

(ドドウ)を経営。サンラーチールで土を造り、有機無農薬栽培を実施し、首都圏の消費者団体・直販消費者の評価は高い。80歳で栽培の講演のかたわら、月平均5日間は「土つくり」の指導を約30年続けている。



いろいろなものをその季節ごとに作つていけば、無農薬に近いところも可能だと思うのですが、それがなかなかできない農業の問題点、そこをどういう風に調整していくかが今の課題なのだと思います。河野さんにお伺いしたのですが、やはり周年でトマトを食べたいですか？

河野..食べたいです。

福井..もうひとつ平原さんに、周年でトマトを取扱いたいですか？

平原..そうですね、ここ2年くらいは、キユウリよりトマトが売上第一位となっていますから。

福井..そうなりますとね、消費者も食べたい、流通の方も取り扱いたいということがありますから。

石原..確かにね、農業は風土とともにありますよ。夏には夏の作物、冬には冬の作物を。それを無視して作るのが施設園芸です。そんな風ではつきり言つていいものがでくるはずがない。だから当然病気とかも出でてくる。その通りなんです。

ただ、経営的に、例えばスーパーにウチのトマトを置いてくれって言うと、まず周年ですか？と聞かれる。周年だったらいですよ、お宅のトマトだつたら味もそこそことだし、周年で供給できるんだつたらそういうスペースを作つて、石原さん用の棚を置きましよう。今言われていかないと、我々農家もなかなか、成

り立つてゆかない。今は、昔みたいにいろいろなものを作つていてる農家はいなくらいのものが出ています。それが最近のことで、今まで化学合成農薬でやつたがコストが安くて、きれいなものがわけですが、実際にはどういう販売ルートを使っておられるんですか？

小林..全部、消費者に直接買って頂いております。

福井..小林さんの考るものは直接販売。

平原さん、こういう販売ルートと言うのは流通としていかがでしょうか。

平原..やはり、そういうものは一般流通には乗り切れない。もっと、生産者対消費者という直接ナルート、小単位での流通ということになるのではないかとおもいます。

福井..单一のものを周年で供給できないようなものは流通にのらないということですね。無農薬あるいは減農薬への資材についてですが、石原さんが使われている天敵、フェロモントラップ、選択性薬剤、マルチ、といった農薬に代われる資材がどれだけそろついているかということが今求められているのだと思います。それがなければ、やはり農薬に頼らざるを得ない。西野さん、こういう資材は、どうぞ充実してきましたか？

日本では摸索段階の

天敵を利用した—PM

西野克志(石黒製薬株式会社..参加者)..今までこそ、BT剤、チエス、トリ

ガード等、本当に害虫だけに効く、天敵昆虫には影響が全くないといつていいらしいのものが出ています。それが最近のことで、今まで化学合成農薬でやつたがコストが安くて、きれいなものが簡単にできるという状況でした。

福井..天敵の出荷量ですけれど、年々増えていますか？

西野..増えてはいると思いますが、利益が出ると言う点ではまだ本当に持出しに近いのです。ヨーロッパでやっているものを日本に持つてきているものですから。向こうではうまくいくても、これがそのまま日本でうまく行くとは限ません。

福井..ヨーロッパではどうですか？

西野..伸びてるとは思いますが、施設栽培の野菜に限られています。ヨーロッパの中でも実際にやつているのは、イギリスやオランダといった北ヨーロッパが中心で、スペインやフランスではまだまだ日本に近い状態です。

福井..まだ歴史が浅いと言つてくださいますが、実際、石原さんのようにそれを極力使いたいと言う生産者が増えているわけです。認定をすると、いう動きもあるようですが、私自身の考えとしては、フェロモンを使つたり、天敵を使つたりと言つて一般的にならないかなと思います。石原さん、どうですか？ こういう技術が一般的になりうですか？

石原..そのためには天敵等の副資材が安くなり、もつと、そういうものをサボートする技術や、資材が出てこないと一般的にはなり得ないと私は思います。でも一般的になるといなあと思つていてます。

いろいろなものを作つていてる農家はいなくらいのものが出てます。それは最近のことで、今まで化学合成農薬でやつたがコストが安くて、きれいなものが簡単にできるという状況でした。

福井..小林先生はいろいろなものを輪番や、適期適作という形でやつておられるわけですが、実際にはどういう販売ルートを使っておられるんですか？

河野..食べたいです。

福井..もうひとつ平原さんに、周年でトマトを取扱いたいですか？

平原..そうですね、ここ2年くらいは、キユウリよりトマトが売上第一位となつておりますから。

福井..そうなりますとね、消費者も食べたい、流通の方も取り扱いたいということがありますから。

石原..確かにね、農業は風土とともにありますよ。夏には夏の作物、冬には冬の作物を。それを無視して作るのが施設園芸です。そんな風ではつきり言つていいものがでくるはずがない。だから当然病気とかも出でてくる。その通りなんです。

ただ、経営的に、例えばスーパーにウチのトマトを置いてくれって言うと、まず周年ですか？と聞かれる。周年だったらいですよ、お宅のトマトだつたら味もそこそことだし、周年で供給できるんだつたらそういうスペースを作つて、石原さん用の棚を置きましよう。今言われていかないと、我々農家もなかなか、成

平原賢一さん

(パネリスト ユニー株食品本部青果部長)
青果物仕入れ担当者としてセリにも参加し経験を重ね、今まで青果物一筋に35年。ユニーは各店舗仕入れを基本に市場仕入れ100%、自社の配達センターを持たず、店頭着

値での商談を行っている。



皿井重典さん

(パネリスト イシグロ農材栽培システム開発室次長)

R.W. 水耕栽培の販売及びそれに伴う技術、システム開発を担当する。点滴養液栽培の普及に伴い、植物体分析、土壤の生土分析を富城県PCセンターの安部所長の指導により栽培の基本とし、肥料、葉面散布の調査、試験を行う。



福井・河野さん、いかがですか？

河野・消費者の要望と、実際のビジネスとの間に不一致というものがあるなど理解いたしました。

福井・IPMとは、まさに石原さんが実践しておられる、天敵、生物農薬を利用し、あるいは湿度を下げてみたりマルチをしてみたり、そういうことになるべく化學農薬を使わないよう農業をやりませんか、という流れのことです。IPMと言うのは英語になつていてことからわかる通り、世界的な流れだと考えていいかと思います。これは、単なる無農薬とか、減農薬とか、農薬を使わなければよいと言うことではどうも済まない。他の手だてを一生懸命考へないと済まない。そういう面でぜひ、指導される方もそうですが、資材会社の方々もそうですが、それに代わる手だてをどんどん提供して頂かないことは成り立ちません。

また、そういう面で消費者の方もあるいは流通の方も、是非そのあたりのことを知つて頂きたいと思うのです。今までには、単に農薬を減らせばオッケーだといったイメージとしてでしかなかつた。農薬を使わないと虫食いになるよ、じゃあんた虫食いのやつ買ってくれよとか、そういう話になつてしまつてはいけないんじゃないかと思うのです。農薬を減らして、他の方法を使いながら、いい農産物を収穫するという農業をなんとか志向できないかと。これがほんとの農業としての、有機農産物、減農薬、あるいは無農薬ではないか、そういう考え方があくまで今の石原さんの事例を含めて出てきているような気がするんです。そういう

う形のものとして、減農薬、無農薬をぜひ、参加されている方も考へて頂きたいと思います。

2 ただ「有機肥料」を使えば「有機農業」と言えるのか

「有機肥料」の前に「土作り」あります

福井・前半部ですね、農薬の問題についていろいろと論議をさせていただきました。後半部では、有機農業を考える場合に、農薬の問題と同時に、もう一つの大きな柱として肥料の問題があります。そのへんについて話を進めてゆきたいと思います。まず皮切りに小林先生。

小林・今の土壤は、置換を行わない土壤になつて。土壤が壊れてるんです。これは、有機農業をやれば解決するという問題ではない。土壤を作り上げた上での有機農業であれば正しい農業であると言えます。

福井・するとですね、まず土作りをする

ことが大切だと言う風に捉えてらつしやると。例えば今、有機農業と一般に言われているような、とにかく何でもいいから堆肥さえ入れれば有機農業だと、化学肥料を使っていなければ有機農業だと言えます。

福井・石原さんは水耕栽培をやっておら

れて、その辺はいかがでしょう。石原・ハイボニカの基本的な考え方方は、二つの標準液を上手に入れてやつて、養液のECで管理する。トマトの木が必要な時に必要なだけ吸うんだ、そういう考え方なんですね。

農産物の「安心」は生産者・消費者相互の信頼の上に成り立つ

福井・肥料で一番大きな問題は、植物が吸い、それが人の口に入るわけですが、成分と言うのは、見えない、分からぬということです。ホウレンソウでも時々問題になつてますが、葉の中に硝酸イオンが多いといったことは、見た目では

液土耕といつた新しい農業の方法を摸索しておられるわけですが、その点如何でやつております。これは私どもが考えたわけではなくて、ヨーロッパでもうほとんどの国がこういう栽培になつていていますよね。一年、半年分の肥料を土の中に入れて、あとは水の管理だけで作物を作つていこうというのは日本だけじゃないですか。植物が今どれだけの肥料を必要としているかを見て、それを水に溶かし、植物に吸わせてやるというものです。要らないものをやる必要はないんですよ。特に窒素はほとんど空中に飛んでるとか、地下水に流れこんでいるそうです。ウチでもデータ的に言うと、公的機関から出でております窒素量の3分の1以下で充分でけています。

福井・そうしますとね、堆肥さえ入れれば有機農業でなくて、その堆肥を入れたとしても保持できるよい土を作ることが先決だということですね。皿井さんにお伺いしたいのですが、今、皿井さんは養

農業から離れ行く「有機・無農薬」のイメージ

羽島パワーファーム公開パネルディスカッション「有機農産物を問う」より



河野 加代子さん

(パネリスト アグリサポートーズクラブ)

子供の頃、父の畠仕事を手伝ったことへの郷愁で、40数年後の今、土に触れる毎日を楽しんでいます。4年前にアグリソポーターに応募したのもこうした土への愛着、土の恵みへの感謝を分かち合う人にお会いしたからです。太陽、雨、季節のうつろいに心を留めた暮らしを人々に伝えたい。(談)

全くわからない。分析して、情報提供することも現状ではしていない。そういう面では、どういう風にこれを考えていいつらいいかと言うところにきておりますが。河野さんその点何か、ご感想を。

河野・実際に、野菜など購入する際に、それがどういう肥料で作られたものであるとか、どういう成分があるのかといったことを考えたことは全くありません。

今の一例のホウレンソウの事件や、輸入果物のことも少し報道がされました。県産品に関してはそんな事はないんだと安心感みたいなものをずっと持つてました。

福井・そうなりますと、本当にその信頼にきちんと応えているかどうかと言ふことが大きな問題となります。例えば流通関係でそういうことを分析し、データにするようなことができた場合、何かメリットがありますか? 平原さん?

平原・いろんな世の中の情報でもって、消費が変化するということが多い

石原一郎さん
(パネリスト 水気耕トマト栽培家 羽島パワーファーム会員)
脱サラして10年、現在1350坪の施設でミニトマト・フルーツトマトの水耕栽培を行っている。安全・安心なクリーン農業をめざして、天敵や拮抗微生物の導入をはじめ。現在、羽島パワーファーム交流部部長、平成11年度より岐阜県指導農業士。

が、一般的には、食に対する安全性で消費者が感じているのは農薬問題の方ではないでしょうか。農薬は使わない方が理想だと思いますし、生産者の方々の努力で、今以上にいいものができるのであれば、我々としても、是非そのようにお願ひしたいと言う意見でございます。

福井・私自身、一番の根本は、河野さんの言われた、信用しているんだというところにあるのではないかと思うのです。あくまでも農産物と言るのはいろんな生産者がきちっとやっていただいているはずだと。現実に話を聞いていかがですか、河野さん。

河野・どなたかが、生産者の方と消費者

の方の立場は相反するものだとおっしゃいましたけれど、私は基本的には同じ立場だと思います。生産者は安心しておいしく食べただよという想いで作っていて下さる。私たちとしても、岐阜県の農産物を食べたとき、これは岐阜県の生産者が作って下さっているんだという信頼の気持ちで受け止めいく。だから私は、相反しているのではなく、お互い思い合つているところでつながつてると言う風に思っています。農薬にしろ、肥料にしろ、いろいろな話しをお聞きしましたけれども、結論は最初と同じで、信じています。

福井・一番の問題は、信頼されているにも関わらず、実際生産をしておられる農家の方が、そういう意識をもつてない、あるいは情報や知識をもつてないといふことがあります。農薬をしておられる農家の方が、そういう意識をもつてない、うことにあるのではないでしょうか。それに対応する能力がない場合、恥ずかしいことだと思うのです。そういう面では是非、生産農家の方々は、当然ここまでやらなければいけないんだと言う意識を持つていただきたいと思うのです。消費者の方も、見てくれさえよければ、あるいは価格、安いにこした事はないんだよと、生産効率のみを消費者の方から、生産者、農家の方に強いてきてはいないだろうかと。やはり、今河野さんのいわれたように、お互に信頼関係を持っていこうといふ姿勢がやはりどうしても必要だと思ふ。この岐阜市で開かれたパネルディスカッションでは、農薬を無くす、あるいは減らすこと、化学肥料を使わないこと即「安全・安心」ではなく、それの使い方とその情報公開こそが「安全・安心」に繋がるという本誌の考え方とはやや異なる意見も出ている。しかし尚、農業経営者たちが自らが「有機・無農薬」を問い合わせるというアクションを起こしたということは、注目されるべきであり、その意義は非常に大きいのではないか。

(編集部)

前半部の農薬の話では、農薬を減らせ

ば無農薬・減農薬じゃない。いろいろな方法で、例えば天敵を使う、フェロモンを使う、と言うような事をしなければ、減農薬は達成できない。もしかしたら、最後の最後には一回くらい使わざるを得ないところがあるかも知れない。ただ、行政は変な事を推進してしまつていると言ふ気がします。

全体の1%くらいしか市場流通していないものを有機栽培だと謳われると、そう謳つていらないものは信用がおけない農産物なんですかということになってしまふ。全ての農産物がそういうものであります。全ての農産物がそういうものであります。そのための農業が進んでしまふ道だと言う風に考えます。感情的な論理で有機栽培を取り扱うのではなくて、地道に正確な情報をもとに一歩一歩、農業の延長線上にある、有機農業、有機栽培と言うものに取り組んでいかなければと考えております。

この岐阜市で開かれたパネルディスカッションでは、農薬を無くす、あるいは減らすこと、化学肥料を使わないこと即「安全・安心」ではなく、それの使い方とその情報公開こそが「安全・安心」に繋がるという本誌の考え方とはやや異なる意見も出ている。しかし尚、農業経営者たちが自らが「有機・無農薬」を問い合わせるというアクションを起こしたということは、注目されるべきであり、その意義は非常に大きいのではないか。